ＩＮＤＥＸ

１　初夜　002

２　オモチャ　071

３　お風呂　083

４　エピローグ　108

1　初夜

俺が仕えるのは王子様だ。
しかも容姿端麗、文武両道で、絶世の美女を思わせる女顔ときた。
問題は俺の仕える王太子様が、俺の好みどストライクだということが問題なのだ。
特に顔。
金色の髪の下に隠れる切れ長の碧眼。戦場に立てばきりりと馬上から敵を睨み付けるあの冷ややかな目つき。最高だ。正直、あの目で睨まれるたび、ゾクゾクする。
そのくせ軍議の合間の休憩で見せる、安らいだあの笑顔。風邪を召された時、病床で書類を処理していた時の姿など、興奮ものだ。ほんのりと上気した顔、苦しげに寄せられた眉。
体毛が薄いのか、彼の顎にひげが生えている姿など見たことがない。夜更けの軍議で

もちゃっかり確認したが、生えていなかった。
最高だ。
だが、いかんせん顔から下の姿形はどうあっても、青年だった。
なで肩なのは良い。だがあの美しい顔の下にある胸はツルンとしてひらべったい。女の胸のふくらみなど、全くない。それに股間のわずかな膨らみ。正直あのサイズなら、俺のちんちんと比べても小さい。
そんなことより問題は彼の顔にうっとりする度、その下の男の身体を何回も、いや何十回も見せられるのがつらい。新手の拷問かと思うほどつらい。
顔は俺の今までの人生のなかで最高に好みだ。
ちょー美人な女顔。
本人はとても気にしていて、言うとプリプリ怒るけど、その怒った顔もかわいい。
何回でも言おう。顔は最高に俺好みだ。
彼が女だったら、今まで勉強してきた戦略を全部駆使して抱く。

なりふり構わず、嫌だと言われるまで、何回でも中出しするだろう。他にも張り型を入れさせて乱れ具合を楽しみたいし、クリをいじって潮も吹かせたい。胸だって俺の肉棒をこすりつけて、なめさせる。ああ、それにそうだ。あの綺麗な顔に存分に精液をひっかけたい。サラサラとした金髪で何回でも拭きたい。

「ん……っ。あの、……これ以上は……ぁぁあ！」

俺の下で女が喘いだ。そうだった。今日は久しぶりに王都に戻ってきたから商売女を買ったのだった。

金髪に青い瞳。殿下によく似た容姿。唯一の違いはちょっとたれ目なこと。胸は手からこぼれる位たっぷりとしていて、あそこの具合もイイ。

ほんの少し身体を左に傾けると気持ちイイのか、シーツの上で身をよじる。

「や……そこ……っ。ダメ……弱いのぉッ！」

「へえ。じゃあ、どこがダメじゃないのか、おじさんに教えてくれないかな？」

俺の年は四十近いが、相手の女の子はまだ二十歳。手首や首元に皺がないから、嘘じ

ゃないだろう。エルフの血が混じってるとか言ってたから、そのせいかもしれない。手からこぼれるほどたっぷりとした乳房をつかみ、乳輪を指でいじってやった。

「ひっ……ンん……――そこ、やぁ……ッ！」

「えー？　君のクリトリス、俺のチンポに吸い付いてきてるけどなあ。こういうつぶつぶをいじられるの、好きなんだろ？」

そっと乳輪から乳首へと指を移して、親指と人差し指でクルクルとつまみあげる。すると膣がキュウキュウと締まって、搾り取ろうとしてくる。

よがってる証拠だ。

ゆっくりと抜こうとすると、彼

女が安堵の息を吐いた。その瞬間を狙って亀頭にクリトリスをくっつけた。

ぶちゅるり。

と、いやらしい音が安宿の部屋に響きわたった。

「――ッ、〜〜、……〜〜、っ！　、ぁぁぁ！　！！」

「クリが弱いんでちゅね。かわいいでちゅね〜」
赤ちゃん言葉であやしてやると、彼女の目に涙が盛り上がる。が、きつく睨んでくるから堪らない。
（あー。殿下もこんな顔浮かべて俺とやってくれねぇかな……）
下衆な考えが浮かんだが、彼の性別は男だ。これはどうにも変えられない。結局、彼によく似た女を買って、殿下を見ることで溜まり続ける鬱憤をこうして晴らしていくしかないのだ。
「潮吹きしたい？　させてあげよっか？　おじさんうまいんだよ」
クリトリスに尿道を吸い付けられて、喘ぐしかない女の子に囁く。
「――ねがい……っ！　中出し……シテ、いい……から……ァ、早くして……ぇ！」
しゃべり方が素に戻っている。この安宿に入った時お願いしたのだ。
口調はきまじめで気弱な感じでお願いしますって。
それを彼女は守らなかった。

これはお仕置きが必要だな。
「ぁ……なン、で……？」
クリトリスにぴたりとくっつけていた肉棒を離して、彼女が困惑している隙に今度は問答無用で突き入れた。
「や……だぁ……！　！　激しくしな……、ひ……っ、んン……！」
ぷちゅぷちゅ、と空気を孕んだ音が絶え間なく響く。
「だーめでしょ。しゃべり方はきまじめで気弱。これ守ってくれないと、おじさん、君にお金払った意味ないでしょ」
むっちりとした太ももを持ち上げて、強くうがったあと、左右に揺らす。一番感じる場所はどこか引き当てる為に亀頭で内壁をかきまぜる。何回も抜き差ししていると、次第に粟立った液体が彼女の膣から漏れ出し始めた。
「ぁ、ぁ、ぁ、ンんっ……！　……、……っ」
必死にまた演技を再開する。口許を手で押さえて必死に声を殺そうとする。その恥じ

らう姿がかわいくて、一番奥を突き上げてやった。
「やぁぁぁ――、！　……っ、っ、イク……イっちゃ……ぁ、ぁ、ぁ、ぁぁぁあああ♡♡」
肉棒をきつく締め上げるように彼女の膣が激しく収縮する。精液をすべて搾り取るようにきつく締まる。その中に俺は精液を全部ぶちまけた。
どぷん、と濃い精液がとめどなく噴き出し、彼女の体内で逆流する。
長い遠征期間、ずっと女日照りが続いていた分、ためにためた精液だ。ちょっとやそっとじゃ収まる気配がない。
ブチュブチュと淫猥な音を垂れ流す膣からようやっと肉棒を抜くと、ぴゅるっと彼女の陰唇からぶちまけられた精液がこぼれ落ちてくる。
まあまあだ。
たれ目じゃなかったら殿下にそっくりだったんだが……。それに肌も彼ほど色白じゃない。少し日に焼けている。
一度吐き出したせいで落ち着いてしまったのか、殿下と違う部分がやけに目につく。

それ自体はささいな違いなのに、一旦気にし始めると嫌でも目について仕方がない。
が、金を払っている手前、これ以上ねだるのは野暮ってもんだ。
「ようし。良く出来た子にはご褒美をあげよう」
言うなり彼女のクリトリスを指でつまんだ。
「ぁ……ダメ……っ。今いじったら……また、イっちゃ……！」
お股に手をあてて必死に自分の秘部を隠そうとするところがいじらしい。これが殿下だったなら、何回楽しめることか。
今はこの子へのご褒美だ。
商売女を何十回も買っているからには、彼女たちを満足させてあげるのも男の甲斐性ってもんだ。
太い親指の腹でクリトリスの小さな粒をゆっくりと優しく押しつぶす。体内からこぼれた精液を人差し指ですくうと、彼女の腰がガクガクと震えた。背中がそり返る。
「やぁ……優しく、……するの……ダメ……っ」

「うーん。聞こえないなあ。ご褒美はちゃんと受け取っとくもんだよ？」
親指の腹でつぶしたクリトリスに精液をひっかける。ヌルついた指で今度は丹念にこねくり回した。右へ、左へ、たまに上向かせる。ゆっくりとしたスピードに彼女が慣れ始めた頃、指の腹で激しくこすり上げた。
「いや……！　やぁ……、おじさ……。ダメ……出ちゃ……う……ぅぅ！」
「いいよ。出して。……ほら……っ」
早くイっちまえと思いながら、
「出せよ」
冷たく命じると、彼女が潮を吹いた。生温かい液体が俺の太ももやシーツを濡らしていく。この潮吹きを見る瞬間がたまらなく好きだ。俺がイかせた体液に濡れた肉棒を、もう一度彼女の中に埋めたらどんな反応を示してくれるだろう。
「いやぁーお漏らししたみたいになっちゃったね♡」
シーツは色の濃い染みを作って、おねしょしたみたいになっている。

俺の出した精液と彼女の出した体液で、グチャグチャに中をかき混ぜてやる。
彼女の目に涙が浮かんで、とうとう手で顔を隠してしまった。
いいね。
顔を見れない方がおじさん、あの人を犯してるみたいでゾクゾクするよ。
殿下、どんな声で泣いてくれるかなぁ。
きっときれいなソプラノを響かせてくれるに違いない。
彼女の身体を起こし、あぐらをかいた股の上に座らせる。勃起した肉棒の上に座らせると、自分の体重でより奥まで挿入できるというわけだ。
「ん……っ……」
声を押し殺す彼女のうなじに顔を近づけて匂いをかぐ。俺の汗と彼女の香水が混じり合って、肉欲を誘う香りになっている。金髪に顔を近づけると、女物の香水が鼻孔に入り込む。
あー。殿下も戦場が長引くと香水つけてる時あるんだよな。王族の嗜みってヤツかな。

殿下の汗と香水が混じった匂い嗅ぎてぇー。もちろん女の身体になった彼を。
「ほぉら。腰おとして？　俺のがゆっくりと入ってくるの分かる？　どんな感じ？」
肉棒がゆっくりと温かい襞に包まれていく。あれだけ出して潮吹きもさせたのに、まだきつく締め付けてくる。ぬちぬち、と音を立てて飲み込んでいく。亀頭でゆるくかき回すと、彼女が身体をのけぞらせた。
「やぁ……っ！　かき回さないで……ッ……、まだ敏感なの……ぉ！」
「またまたあ。ほら、子宮口とちゅっちゅできるか、試してみようよ」
柳のように細い腰をがっちりと両手で掴んで、どんどん飲み込ませていく。俺の腹に手をついて抵抗するが、こういう時の反応はもっと激しくしてくれ、だ。何度も買ったからよく知っている。
竿の根元まで入れ込むと、中出ししていた精液がぶちゅん、と彼女の下の口からはみ出てくる。金色の陰毛が俺の黒い毛と絡みあっていた。精液が絡みついた縮れ毛は淫靡だった。

「お。吸い付いた」
その言葉通り、彼女の子宮口にようやっとたどりつく。睾丸にたまった精液を絞り出そうと、むっちりとしたお口が亀頭にぴったりとくっついていた。びくんびくんと逃げまわる腰を掴み、より深くくわえ込ませる。ぷちゅん、ぷちゅん、と口づけしている音が伝わってきた。
「たくさんイかせてあげるからね」
そう言って彼女がよがり狂うまで何度も突き上げた。

「性転換する秘薬ねぇ……」
あのあと三回戦やり終えて、宿泊することに決めると彼女はおもしろいものを持ち出してきた。

なんでもエルフが開発したクスリで、いまやこのクスリをキめながらやる男が増えているらしい。特に既婚者に大人気らしく、ふだんは攻められてる人妻が逆に夫の性感帯を敏感にすることができるらしく、お貴族さまのなかにも購入者が増えつつあるらしい。

「この辺りで最近エルフが風俗のお店構えてることが増えてきたでしょ？　あれもこのクスリのお陰ってワケ」

そういって彼女が小瓶を差し出した。

小さなガラス瓶のなかには怪しい紫色の液体が少量入っている。

「ほんとに変身するの？　この量で」

「あーっ！　おじさんが常連だから今回はタダでサービスしてあげようと思ってたのに。そんな事言うならあげない」

「いやいやいや！　ほしい！　とってもほしいよ？！」

でも俺がクスリ盛りたい相手は、うちの第一王子様なんですよ。もしも毒薬だったら俺は国賊まちがいなし。

一気に縛り首だ。それだけは避けたい。
「ほら。おじさん、いっつも上司の貴族の男の子が顔だけちょー好みって言ってたじゃん。このクスリ使えば、ヤれちゃうかもよ？　ちなみにこれ催淫効果もあるの。一服盛ったあとに、なし崩しのままヤれちゃうってワケ」
疑り深い俺のために彼女はさらにとっておきの情報を披露してくれた。
「先月、公爵家の当主が夫婦そろって一ヶ月仕事とりやめになって、領地で大混乱が起きた事件知ってるでしょ？　あれ、このクスリでラリっちゃったのが原因なんだよ」
「げ」
その事件はよく知っている。
公爵家に使いを出したら一月なんの音沙汰もなかった。問いつめたら当主夫妻が閨にこもりっきりだったという話だ。あの時は妙なクスリが出回っているなあと思っていたが、まさかそれがこのクスリだったとは……。
俄然、クスリの信憑性が増してきた。

ただ、ここで一つ疑問が残る。
「なんでおじさんにタダでくれるの？　安くないでしょ？　このクスリ」
公爵夫妻が求めるほどなのだから、その価値たるや相当なものだろう。
役人である俺の給料で買えるとは到底思えない。
彼女は身体にまっしろなシーツを巻き付けながら、ちょっと照れた顔で言った。
「だっておじさん、他の男と違って優しいし、あたしのこと、毎回イかせてくれるじゃない？　あそこまで丁寧に抱いてくれる男ってなかなかいないからさ。だからこれは、そのお礼」
ランプに照らされた彼女の目はうるんでいた。殿下のことがなかったら、俺の愛人になる？　とか言いだす場面だ。
耐えたけど。
むちゃくちゃ我慢して耐えたけど。
代わりに彼女の腰を抱き寄せた。

「ん……。今日はもう、おやすみでしょ？」
「今のでまた可愛がりたくなったなぁ。おじさん」
「それは嬉しいけど……」
眉を下げて困った顔を浮かべる。これはもう一押しすればいけるな。
シーツにくるまれた胸に顔をうずめて、石けんの香りを楽しみながら、彼女の乳房をかぷりと食んだ。やわらかい乳房を唇ではみはみしながら、ベロで乳首をなめた。
ツンツン、と舌で乳首を押しつぶすと彼女がびくっと肩を揺らした。さらりとした金髪が肩からすべり落ちてくる。
「だめ？」
上目遣いで頼み込むと、彼女は少し迷ってから頷いてくれた。
よし。これで今夜の宿代は少し安く済む……かもしれない。そうこうして彼女と一夜を伴にし、クスリを受け取って、軽くなった財布を片手に屋敷に帰った。
王子殿下の腹心、ベルトラン。

それが俺の名前だ。
彼の遠征に従って軍略を練るのが仕事だ。
ここ数年は父王が第二王子を溺愛していることもあって、宮殿内部は第一王子派と第二王子派で分裂している。由緒正しき貴族の出なら、ここで俺にも勧誘の魔の手が及ぶのだろうが、あいにくと平民出の俺にはとんと縁のない話だ。
まあ、そのせいか殿下も俺に気安く話しかけてくれる。特に軍記物語や古書を集めることが好きで、それを餌に何度か彼を屋敷に招いた事がある。
父親に冷たくあしらわれる気持ちを、父親に近い年齢の俺と会話することで慰めている節がなくもない。彼の目に表れていたからだ。
十八才を迎える青年には、この四十近いおじさんが立派な男に見えるらしい。
その中身が王子殿下の顔が好みで仕えているだけと知ったら、さぞ幻滅するだろう。
しかも遠征から帰る度に風俗通いと来た。
しかしそんな因縁とも、もうおさらばだ。

ちゃぷん、と小瓶の中に入った液体が妖しく揺れる。
夕暮れ時。
屋敷の自室で椅子に腰掛けながら、小瓶のフタを外す。すん、と鼻を揺らして匂いを嗅ぐが確かに何も香ってこない。無味無臭といった彼女の言葉は正しい。
しかし実験もせぬまま彼にクスリを盛るのは恐ろしい。俺は屋敷の庭で飼われている雌鳥を連れてきて、一滴クスリを垂らした水をやった。
見る間に毛並みや顔や頭の形が変化していき、気づけば一匹の雄々しい雄鳥が立っていた。
「マジかよ……」
変化を見た瞬間、鳥肌が立った。
彼を本当に俺の女にさせる手段が手に入ってしまったのだ。これは試すしかない。俺の悲願がようやく成就する時が来た。
まず茶会と称して彼を呼び寄せる。普段と変わらぬ雰囲気でさりげなさを装いながら

誘うのだ。招くのは寝室に近い部屋がいいだろう。俺が初めての相手になるワケだから、ローションの種類は豊富な方がいい。

液体型にカプセル型。

特にカプセル型は女の子に大人気だった。ブドウよりも小粒なカプセルを秘部に入れて、指でかき回すのだ。徐々に体内の熱でカプセルは溶けていくが、俺の指でもつぶせる。

クンニでなめ回したっていい。やわらかい肉芽を舌でほせったら、どんな反応をするのか。想像するだけで鼻血ものだ。

いやいや。急いては事をし損じる。

こういう時は焦らず、じっくりと進めるのが一番だ。

そうしてあのクスリをもらってから一週間後、王子様を俺の屋敷に連れてくることに成功した。

あの殿下が。ルネが俺のモノになる。

そう思うと、気がはやってなかなか寝付けなかった。
「すまない。遅くなった」
呼び鈴を鳴らしてやってきた彼は普段通りだった。屋敷の前庭には彼が乗ってきた馬車が止まっていた。御者や伴の騎士が一礼して、去って行く。
なにせ今日はお泊まりなのだ。
遠征が長く続いた事もあり、気分転換に我が家で一泊、貴重な書物が読み放題と喧伝したら彼は堅物の従者が止めるより先に頷いていた。
無類の古書好き。
そんなちょっと地味な趣味を持っている点も俺が好きなところだ。
「お前の屋敷は落ち着くな」
「地味っていう意味なら、そう仰って構わないんですよ」
「まさか。時間がゆったり流れているように思えて、気に入っているんだ」
今日の彼は公務を行う日と違って、簡素な衣装だった。

昼さがりの光を受けてきらきらと輝く金髪によく似合うよう、藍色の上着に白いシャツを身につけている。すらりとした足は黒いズボンに包まれている。

この身体があのクスリを飲んだら、どんな変化をするのか考えただけでよだれが出そうだった。

ごくりと唾を飲み込みながら、彼を二階の書斎へと案内する。ここが寝室に一番近い。天井まである書棚には古今東西の資料がしまわれている。窓辺に置かれた小さな丸テーブルに彼にとっての本日のメインディッシュを置いてある。

西の大陸で百年ほど昔に書かれた軍記物語らしい。まだ俺も読み込んではいない。初めてページをめくる権利は彼のために残してあった。これを買うのにもなかなか結構な金がかかっているのだが、まあ、そこはそれ。今回の必要経費ってところだ。

あのクスリを直接買い付けるよりはきっと安い。

「お茶をお持ちしますよ。先に読んでて下さい」

「すまないな」

王族なのに彼はいばり散らす事もない。テーブルのそばにある椅子に腰かけ、視線は書物に釘付けだ。子どもみたいに目をきらきらと輝かせて、書物をためつすがめつ見つめている。

「読んでて構いませんよ」

「本当かっ」

王族だというのに家主の許可をいちいち取るあたり、本当にこの人はまじめだ。そんなところが可愛いのだが。

春の光が差し込む窓辺で彼が書物に夢中になっているのをしっかり確認してから部屋を出た。今日は小間使いにも暇を与えていて、屋敷は俺とあの人しかいない。まさに二人っきりというワケだ。

一階の台所へと入り早速湯を沸かして、ティーカップに茶を注ぐ。そして例のクスリを三滴、垂らした。あのあと雄鳥に変身した雌鳥には、クスリ入りの水を飲ませると元に戻った。人間と雌鳥では身体の大きさも違う。少し量を増やしたのはそれが理由だっ

たが、催淫効果も期待しての事だった。
部屋に戻り、もはや書物に夢中となっている彼の手元にティーカップを置いた。
「このお茶はモラン侯爵家から頂いたものなんですよ」
もちろん嘘っぱちだが、モラン侯爵家は第二王子派の人間だ。飲んだあと彼を納得させるのには十分な理由となる。あいまいな返事をしながら彼の手がティーカップに伸びた。
一口、二口、含む。
ごくりと彼の喉が動いて、飲み下されていく。ふだんなら見たくもない喉仏だが今日は違う。俺にはっきりと彼がクスリを飲んだことを伝えてくれた。
ティーカップを置いて、新たなページをめくろうとした瞬間、変化があった。
「――っ！　……ぁ、なに……が、起き……て……！」
ガタン。
と、音を立てて彼が椅子から床に倒れる。自分の身体をきつく手で抱きしめて、絨毯

が敷かれた床でもだえうった。
「殿下……大丈夫ですか？」
「ぅう……、――身体が、あつ……、……ぃ！」
身をよじって上着のボタンを外す。と、その胸元がゆっくりとふくらんでいく。広い肩幅はどんどん縮み、太ももは丸みを帯びていく。尻はなめらかなラインを描き、袖から覗いていた手首は縮みほっそりとした指先だけが出ていた。
しゅるしゅる、と音を立てて全身が縮み、上着やズボンの裾が余る。しかし胸元だけは豊かで、はちきれんばかりの胸にふくらんでいた。
うわ。最高。
「ぇ……、……。なんだ、これ……？」
声も女みたいに高くなっていた。
いいや、正真正銘の女だ。
突然の変身に戸惑っている彼に俺はたたみかけた。

「もしやモラン侯爵から贈られた茶葉に何か仕込まれていたのかもしれません！　街で男を女に変えるクスリが出回っていると聞きました。もしかしたらそれかも……」
いけしゃあしゃあと説明すると、途端に彼の顔が真っ青に変わった。
「男を女に変える……？」
そっと彼が――いや彼女が自分の股間に手をあてる。そこにはあるべきはずだったモノはもう無い。第一王子たる証はどこにもなかった。血の気が引いていく姿に少々不憫さを感じたが、仕方ない。
俺の欲望のほうが大事だ。
「ぁ……、いやだ……こんな、どうしたら……っ」
か細い手が俺の二の腕に絡んでくる。当然だ。このきまじめな殿下は父王に認められる為に今まで必死に頑張ってきたのだ。その頑張りがこんなクスリ一つで変えられたとあれば、元からあったかも分からぬ父からの愛情がさらに遠のく事は必至だ。
今にも陶磁器みたいに白い指をなめ回したかったが、必死に我慢した。

ここが演技のしどころだぞ。俺。
すう、と息を吸い込んで彼女の耳元に嘘を吹き付ける。
「男と交われば元に戻ると噂で聞いたことがあります……」
俺の息がかかって感じたのか、びくんと細い肩が揺れる。
いいですねぇ。すごく敏感だ。
「――本当か……？」
美しい碧眼に涙が盛り上がっていく。怯えきった表情は、戦場で見た凛々しさなど全くない。今はか弱い少女の顔だ。細い眉を寄せて、薄い唇をくいしばりこちらを見上げてくる表情ときたら、垂涎ものだ。
「ええ。殿下が良ければ、俺が相手をしますが？」
主導権は相手にあると思い込ませる。あくまでやろうと認めたのは俺ではなく、殿下本人だと思わせなくてはならない。そうしておけば、後々なにかあったとしても、逃げ道は用意できる。

そっとひとまわり小さくなった身体を抱き寄せる。豊満な胸がへその近くに当たり、下半身がむずむずした。彼女のつむじに顔を寄せると、かぐわしい香りと先ほどの変身で汗をかいたのか、蒸れた匂いがした。

早く返事をしてくれ。でないと襲ってしまう。

「ぁ……分かった」

か細い声でつむがれた了承に、待ってましたと言わんばかりに俺は彼女を担ぎ上げた。

「ぅわっ……、ちょっ、お前、突然動かす、な……っ」

ぱぁん、となにかがはじけ飛ぶ音が聞こえた。

見ると彼の胸元のボタンがはじけ飛んでいた。白く柔らかい胸が今や丸見えだった。シャツの間から薄桃色の乳首が見えた。ほんのりと赤みがかった乳輪も。

「やっ……見るな！　ばか者」

顔をまっかにして必死に胸元を手で隠すが、あまりの豊満さに隠しきれていない。白い肌が指からこぼれている。

「いいじゃないですか。どうせ男同士なんですし。元は」
ゆらゆらとお姫さま抱っこのまま、寝室へと向かう。
「そういう問題ではない！　女性がみだりに肌をさらしていい理由がどこにあるというのだ」
どうやら彼としては女になった身体がまだ《自分のもの》という感覚がないらしい。
まあ、それもこの数時間で変わる。変えてみせる。
足で寝室のドアを乱暴に開くと、殿下が俺のシャツをひっぱった。白い指先は頼りなく震えている。
「その……お前は、いいのか？　相手が俺で……」
「あのね。殿下。俺のこといくつだと思ってるんです？　女を抱いた事くらいありますよ」
すると彼女は頬をさっと赤らめて口許を手で隠した。
「それは悪いことを聞いた……。その、許せ」

「殿下こそいいんですか？　女性経験なんて無いでしょ？」
「か、会話したことくらい、俺にもある」
キッと睨み付けてきたが、効果はない。その間にも寝室の中央にある大きなベッドに近づいて、彼女の身体を横たえた。胸は相変わらず自分の手で隠したままだ。
彼女と俺の体重を受けて、寝台が軋んだ。その音にびくりと肩をふるわせる。
うわ。美少女といけないコトしてる雰囲気でしょ。こいつは。
まあ、そういうコトをこれから実際するワケなのだが……。
「ほら。手どかして下さい」
「しかしだな……！」
豊満な胸を隠していた手を掴んで、頭の上でまとめあげる。すると豊かな乳房が顔を出した。その谷間に顔をうずめると予想通り、彼女のさわやかな香水と汗がまじりあっていた。
クンクン、と匂いをかぐと、彼女が嫌がって暴れ始める。

「やだ……ゃ……っ、そんなところ嗅ぐな！」
「えぇ？　イイ匂いしますよ。殿下の汗で蒸れた匂い。ちょっとしょっぱいかな」
でろり、と舌で白い乳房をなめあげると、細い腰がわなないた。そのまま胸の谷間をじっくりと味わったあと、乳輪をぐるりと舌でなめた。敏感な乳首がすぐに上向く。
いいね。いいねぇ。想像以上だわ。
ツン、と上向いた乳首を指でつまみ上げ、ねじり、小さな穴に舌を突っ込んでは乳首を押しつぶし、舌で何度もねぶり上げた。
「や、……ぁ、ぁ……ぁぁあッッッ！」
「んー、すごいなあ。殿下のおっぱい。俺の舌で感じまくってるじゃないですか。ほんとに女の子みたいですね」
「だれが……！　俺は……男だと……いって……。ぁ、ぁ、ぁ、いや……ぁ！」
身をよじって俺の手から逃げようとするが、そうはいかない。
俺の唾液でまんべんなく濡れた胸を揉みしだいた。ぬるぬるとすべる感触が気持ちい

いのか、殿下の腰が誘うように揺れている。うねるようなその動きに彼女の膣を想像して、俺の息子はいきり立った。彼女の身体にまたがったまま、ズボンを穿いていてもはっきりと分かるほどふくらんだ肉棒を彼女の下腹部にこすりつける。
「ひっ……あ、やだ……くっつけて、くるな……ぁ……」
「あー。分かっちゃいました？　でも、これを殿下のナカに入れたら、男の子に戻れるんですよ？」
すると彼女はほんの数秒だが、逡巡する様子を見せた。
早く終わらせたいという気持ちと、男に戻るために俺とセックスするのかという気持ちで葛藤している。その葛藤する表情をさらに満喫したくて、俺はズボンのベルトを抜いて、自分の性器を取りだした。
まだフル勃起には至っていないが、亀頭は彼女の痴態を見たせいでヌルついている。
そっとその先端をへその下にどさりと乗せて、腰を動かした。
「……や。よせ……！　やめろ……っ！　交わるだけ、と、言った……だろう……ッ」

今までなんとか虚勢を張っていた顔に、本当の意味での怯えが走る。
女の顔だ。
自分ではどうにもできない力に怯えて屈するしかない表情に、俺のムスコはさらに硬くなった。ヌルついた体液を彼女のへそにまで引き延ばす。
「男と女が交わるって言ったら、こういうことですよ。知らなかったんですか？」
ほら。もっと俺に脅えろ。メスの顔を見せてみろ。
自由になった手で豊満な胸を隠そうとしたが、俺の唾液がべっとりとついた胸にふれて、ビクン、と身体を揺らした。
「おっ。そろそろ自分の身体が女になってるって自覚してきました？」
「ちがっ……これは……」
「違わないでしょ？　これが今のあんたの胸ですよ。俺になめまわされてツン、と上向いた乳首も、唾液でべとべとになったおっぱいも。それに――」
胸を隠していた彼女の手を引いて、俺のムスコに添わせる。ヌルついた竿に彼女の白

魚のような手を這わせて、強制的にしごかせた。
「ひっ……やめ……！」
「ほうら。あんたの身体ちょっとなめまわしただけで、こんなに勃っちゃったんですよ。責任とって最後までヤらせて下さいよ。王子様」
ガタガタと震える指を絶対に逃がさないように、手のひら全体でさわらせる。
大人の男の太い肉棒にさわったことなど一度もないのだろう。俺の手に包まれて怯える指に至福を覚えた。まだ誰にも犯されたことのない正真正銘の処女を俺だけが汚せる喜び。しかも相手は長年抱きたいと夢見た人ときた。これでフル勃起しない男がいるかよ。
柔らかい指の腹で、竿に浮かんだ筋をなでさせた。その度に彼女が目を伏せて、顔をそらす。きゅっと噛みしめられた唇はもうこれ以上、一音も言葉を漏らすまいとがんばっている。
無駄なあがきなのになぁ。

俺は唇のにやつきをおさえきれなかった。このまま彼女が羞恥にあおられる姿を堪能し続けるのも悪くないが、もぞもぞと動く彼女の腰つきが俺を誘ってくる。
そういや催淫効果があるクスリだって言ってたっけ……。
「ふう。もうイイですよ」
俺のヌルつきでふやけた指を解放してやると、すぐさま離れていく。
ひどいな。まだまだ序の口なのに。
全くといっていいほど解いてもらえない警戒心に、心がささくれだった。口をすぼめて、またがっていた彼女の身体からどく。
「もう……終わりか……？」
ホッ、と安堵する表情にイタズラ心が沸いた。
「んなワケないでしょ」
すぐさま彼女の足を開いて、股の間に座り込み、肉付きの良い足を両肩に持ち上げた。
「やっ……め……」

じたばたと暴れられたが無視した。そのままサイズのあわなくなったズボンの股間を観察する。予想通り、そこには色の濃い染みができてた。見るとシーツもじんわりと濡れていた。まるでおもらししした光景にムスコがさらに硬くなる。

「お〜。ズボンぐっしょぐしょですね。これは中の下着も凄いことになってるのかな?」

「だ、だめ……だ、……やめろっ!」

必死に彼女が手を伸ばして、ゆるくなったベルトに手をかけた俺を止めようとする。だが力の差は歴然だった。彼女の手をはねのけて、ベルトを引き抜き、ズボンのチャックをゆっくりと下ろした。その奥は男ものの下着だった。ズボンを引き抜くと、肉感的な太ももが現れ、明らかに彼女の細腰に似合っていない男ものの下着が、まるで俺の下着を彼女に穿かせている気分になった。

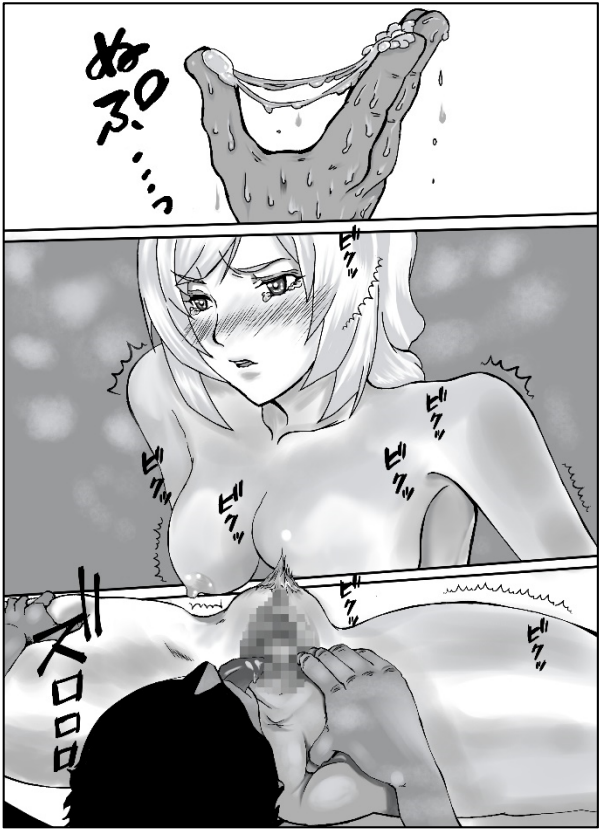
「はい。ご開帳〜ってね」

脱がしたズボンをベッドの下に放り投げ、彼女の股を開かせる。いまや下着の上からでも彼女が濡れているのはありありと見えていた。催淫効果バツグン。いまや彼女の愛

液で下着の秘部は透けており、髪と同じ金色の陰毛やクリトリスがうっすらと浮かんでいた。
「うひょー。下のお口、大洪水じゃないですか。俺のムスコさわって感じちゃったんですか？　それともおっぱいなめ回したせい？　乳首が弱いのかな？」
「ぅ……、うるさい！　……やるなら早くやればいいだろう！」
「またまたぁ。そんな事言って。ダメですよ。こういうのは時間かけて、じっくりやらないと」
「じっくり……？！」
さっさと終わるものと思っていたのだろう。彼女のうろたえぶりは見ているこっちが可哀想に思えるほどだった。
「そうですよ。じっくりしないと、殿下のアソコもびっくりしちゃいますよ。女の子の身体ってのは繊細なんです」
「それは……そう……だが。しかし」

「もしかして早く終わらせたいんですか？」
「あ、当たり前だろう！　こんな酷い辱めを受けるなど……相手がお前でなければ……その、……耐えられん！」
うわ。今すごいこと言ったよ。この人。相手が俺だからここまで耐えたとか、顔のにやけが止まらん。
確かにこの人に仕えてからもう十年経つけど、ここまで心を許してもらえていたとは思わなかった。
四十過ぎたおじさんだよ。こっちは。しかも平民出。相手は王族だっていうのに……。
くぅ〜っ。涙が出るわ。
「ど、どうかしたのか？」
今までぺらぺらと喋っていた俺が黙りこくったのが意外だったのか、彼女が手を伸ばしてくる。その手を両手でがっしりと掴んだ。
「今日、俺めちゃくちゃ頑張って働きますから！　殿下がとろっとろになるまで、全力

でご奉仕しますから！」
「ぇ……いや、それは求めてな……っ！」
彼女の抗弁を聞くより先に、下着を引き抜いた。愛液が糸を引いている。予想通り彼女の秘部はぐちょぐちょに濡れそぼっていた。クリトリスが昼下がりの光を受けて、ヌラヌラとテカっている。
くぷん。
と、俺に見られて恥ずかしいのか、彼女の秘部がまた可愛らしい音を立てて愛液を漏らす。彼女の秘部は薄桃色で今までどんな男もふれてない事を示していた。おそらく男だった頃もオナニーなどしたことがないのだろう。自分でいじった形跡もない。
まさに手つかずの状態だった。金色の陰毛は愛液と蒸れた汗でしっとりと濡れていた。顔を近づけると、ほんのりとしょっぱい匂いと彼女の体臭が香った。
「おしっこの匂いがしますね」
「なっ？　！　……貴様、そういうことは言うなと……！」


ぬぷ…っ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ズロロロ

彼女は顔から火を噴き出すほど真っ赤になって、ぽかすかと頭や肩をなぐったり蹴ったりしてきたが、全然痛くない。仔猫が噛みついてくるようなものだ。
そっと彼女の秘部に手をあてて、とめどなく流れる愛液を手ですくって彼女の前に差し出すと、すぐに動きは止まった。
ねばつく液体を指で引き延ばし、指の谷間で糸が垂れる様子を見せつける。
「ぁ、……ゃ……」
「殿下の。すごい糸引いてるの、分かります？　俺の愛撫で感じてくれたんですかねー」
「ちが……っ」
必死に否定する彼女の顔を観察しながら、俺は彼女の愛液を口に含んだ。舌に乗せて、まんべんなく味わった。
「もう少し、トロつきがほしいかな。ちょっと、しょっぱい味がするのは汗ですかね？　それとも別のやつ？」
ゆっくりと彼女の顔に近づいて、可憐な唇に彼女の愛液を流し込む。